

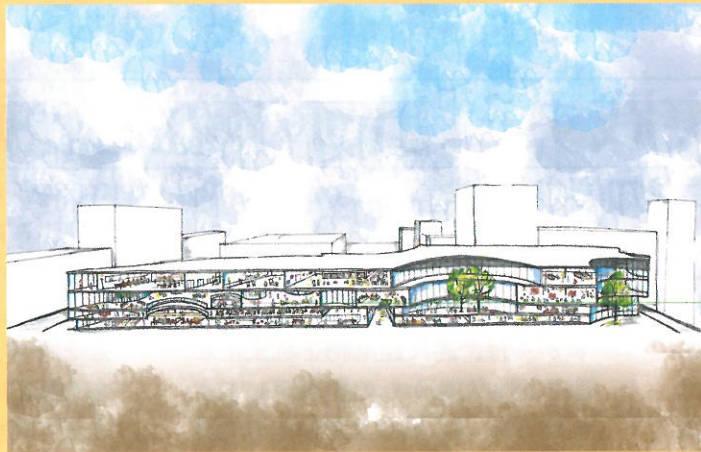
桜建会報

2013-December
No.98

OKEN

日本大学桜門建築会

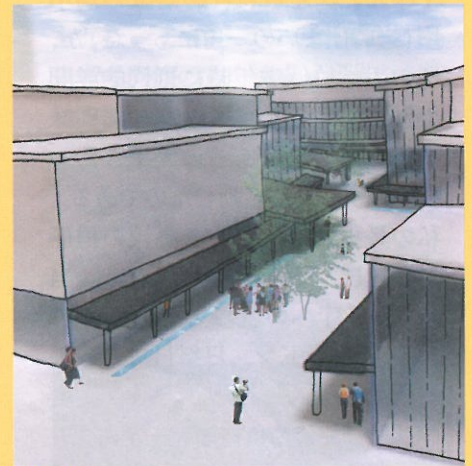
<http://www.okenkai.jp/>



第5回桜建会学生コンペ最優秀賞
「明日の市庁舎—未来を育てるプラットフォーム」
小関真子、川田実可子、安西彩香



同優秀賞
「長岡市役所説明書」
落合恵子、中辻千尋、奈良橋佳洋



同優秀賞
「雁木が結ぶ、多世代よったかりの場—長岡シティーホール」
中島奈津実

contents

特集／首長として活躍する卒業生たち——2

栃木県知事・福田富一氏、北上市長・高橋敏彦氏、板橋区長・坂本健氏

トピックス／第5回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告——8

オウケンカフェ・レポート——11

研究室紹介——12

酒匂研究室、浅野研究室、桜井研究室、建築文化・社会構造設計研究室

事務局だより——14

学部ニュース——15

首長として活躍する卒業生たち

建築系大学の卒業後に進む先は、施工や設計だけではない。学んだことを生かすことのできる、建築やまちとの関わり方は多様にあるだろう。その中でも、影響力が大きいと思われるもののひとつが、自治体のトップである首長だ。日大の卒業生でも、各地で首長を務める方々がいる。今回の特集では、この方々がなぜ首長を志したのか、実際に首長として、どのようなことを考え、なにをしているのか、またやろうとしているのかをうかがった。みなさんの活躍を通して日大卒業生のひろがり、そして建築のひろがりを紹介する。

30年来実践する「出前の政治」の原点

栃木県知事◎福田富一（1979年理工学部建築学科卒業）

建築家を志した理由

私は農家の長男として生まれた。長男は農業を継ぐという時代に、建築家を志し、工業高校の建築科で学んだ。それは、わが家の馬小屋(当時住まいの一角にあった)が、私の小学校低学年時に近代的洋間の勉強部屋として甦る過程に興味を覚えたことにある。大工さんの技術のすべてに感動したのである。私の長男という立場を高校の担任が考慮し、民間の約半分の給料(当時)の県庁への就職を薦めてくれた。「土曜半ドン、日祭日に親の手伝いができるぞ……」と言う先生のひと言で公務員技術者を選んだ。

働きながら大学で学ぶ

「遅れず休まず働かず」は、かつて公務員の代名詞となったことばだ(今は、まったくあてはまらないと思う)。県庁で働き始めたら、給料の半分近くがマイカーローン、残りはガソリン代とかガールフレンドとの食事代で消えてしまう。そんなことに時間を費やす人生に疑問を感じた。そして建築物の許認可行政というポジションに、若い私は、時間も体ももて余っていた。

さらに、立法者たるべき県議会議員からは、違反建築物を合法化せよと言わんばかりの横車がしょっちゅう舞い込んできた。そして議員は偉すぎるとも感じた。「地盤」「かばん」「カンバン」が政治家となる要件と言われた時代だが、自分がそこに風穴を開けたいと思うようになった。なにより、政治を身近なものに取り戻したいと考え、実行に移した。今自分にできることはなにかを問い、一念発起し、日本大学理工学部建築学科の夜間部で学ぶことからスタートした。

県職員としての仕事と、1日5時間公共交通を乗り継ぐ夜学生の二足の草鞋(わらじ)の生活は、私自身の性格をも変えた。

大学では教授から「私は赤点はつけないから、今やりたいことをやりたまえ」と言われ、別の教授からは「君たち210名の内、3分の1しか4年で卒業できないよ」と諭された。大人は、時間の使い方を瞬間、瞬間で判断し、後悔しないということ学んだ。そして、決断力・判断力をも養われることになる。

大学を4年で卒業すべく、能力・体力の限界に挑んだ。当然、自由も青春もなかったが、遅い精神

力と自信、すなわち「やればできる」ことを学んだ。また、日大人としての俯(鳥)瞰力を身につけ、「木を見て森を見ず」から卒業した。

公務員から政治家へ

県庁では、建築行政のほかに、大学卒業後は県営住宅の建設分野にも携わった。民間に委託した中層住宅の設計変更時の基礎の設計と構造計算、擁壁の設計などは自信をもって取り組めたと、現場監理能力などにも生かされたと思う。

9年勤めた県庁を辞する際、職場の皆さんが送別会を開いてくれた。その皆さんへのお礼とあわせ、「3階南東の角部屋に戻ってきます」と宣言した。「それは、なんだ」と聞かれたので、「知事室です」と答えたが、笑われてしまった。

当時の県の住宅課や建築課の課長は国から出向する場合が多く、まして高卒入庁後大学の夜間部を卒業しただけでは、昇任・昇格の可能性がない時代だった。それなら選挙で選ばれるほうが、よほど可能性があるのではないかと考えた。宇都宮市議会議員選挙に目標を立て準備に入った時、国務大臣・総務庁長官を務めることになる岩崎

栃木県データ

面積/6408.28km² 人口/198万7119人(2013年10月)
世帯数/79万2674世帯(2013年11月) 総予算/7794.99億円(2013年度)
県庁所在地/宇都宮市

純三参議院議員(当時)が日大の栃木校友会の支部長であることから、知人が紹介してくれ、教を請うた。その折、「先憂後楽」という色紙をくださり「政治家は人の憂いに先ず骨を折り、自分の楽しみは後から行うのが基本、それができないのなら公務員には戻れないのだから、実業界で生きよ」と励まされた。

以来、私の座右の銘は「先憂後楽」であり、政治は住民の身近にありとして「出前の政治=自ら出向いて現場を見る、関係者から直接話を聞く」を30年来実践し続けている。現在、栃木県庁のモットーは「現場主義」「スピード重視」「速やかな情報発信」である。

ところで、日大人は全国隅々で活躍し、派手さはないが、堅実で安定しているし、団結力も素晴らしいと感じている。まさに、私にとっての日大は、人生の扉を開けてくれた存在なのだ。

首長として実行したこと

政治家としての手腕を経営に例えれば、専門店よりスーパーマーケットや百貨店の社長として消費者ニーズを見極めて品揃えし、人気のある店にしたいと考えたと考えてもよい。29歳で宇都宮市議会議員に当選し2期、栃木県議会議員選挙の初陣は飾れなかったが、以後2期、県内最多得票で当選。宇都宮市長も2回当選し、知事3期目を迎えることができた。

宇都宮市長としては、窓口業務を夜7時まで延長したが、交代勤務で費用負担は発生しなかった。全国初の実質的な少人数学級・宇都宮方式の実現。知事としては、3年間の財政健全化プログラムによる収支均衡予算を達成した。都内にいわゆる営業本部組織の設置、食品関連産業の集積による内需型産業振興を目指す「フードバレー栃木」の推進などに取り組んできた。

技術者の視点からは、土木・建築・農業土木・林業などの技術分野の交流を活発化させ、失敗事例などの情報を共有し、設計や現場監理に生かす取り組みや、市町村技術者と県職員との技術交流などを積極的に進めている。

生きることは挑戦すること

将軍家剣術指南役の柳生家の家訓に、「小才は縁に会っても縁に気づかず、中才は縁に会っても縁を生かせず、大才は袖すり合った縁をも生かす」とある。卒業生や学生の皆さんには、日本大学で学んだ縁を大切に、大いに生かして欲しいと願っている。

成功の反対は失敗でなく、なにもしないことだ。大いに挑戦をし、先輩や同僚の力を遠慮せず借り、成功し社会に貢献して恩に報いるという人生をともに歩みたい。



上左/1985年当時市議として、宇都宮市議会で質問に立つ福田氏。上右/栃木県出身のサッカー選手安藤梢選手(右)と駿島彩選手にスポーツ功労賞を授与。下/東京スカイツリーにある栃木県のアンテナショップ「とちまるショップ」のオープンセレモニー



Fukuda Tomikazu
1953年栃木県生まれ。47都道府県で唯一、本学出身の知事。9年間県庁に勤務した後、宇都宮市議会議員選挙に出馬。初当選を果たす。その後、県議会議員、宇都宮市長と着実に歩を進め、2004年、栃木県知事に就任。現在、本学および獨協医科大学の客員・特任教授を務めるほか、地元で政治塾を主催することを予定しつつ、生き方の指南や、引きこもりに悩む若者の社会復帰支援なども行っている。



地方色を生かす持続可能なまちづくり

岩手県北上市長◎高橋敏彦(1980年大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了)

設計の仕事からまちづくりへ

私が理工学部建築学科に在籍したのは、大学院も含めて1974年4月から80年3月までの6年間である。学部卒業時はオイルショックの影響がまだ残っていたのか、同級生の就職先がなかなか見つからなかったことを覚えている。

父親が設計事務所を主宰していたので、大学では岩手県営体育館などを設計されていた小林美夫教授の元で指導を受けようと、小林先生が主宰するアトリエKと研究室で建築の設計を実践的に学ばせていただいた。直接ご指導いただいたのは、現在、理工学部社会交通工学科で特任教授をされている伊澤岬先生であった。

卒業後は地元に戻り、父の事務所ですべての仕事をしていましたが、小さい事務所だったので仕事が潤沢にある

わけではなく、自ら地域に出て仕事探しをしなければならなかった。そうした事情で地元の青年会議所に入り、まちづくり活動に関わり始めるようになった。今思えば、市長という職にあるのは、これがきっかけだったのかもしれない。

地元施設の設計と地域活動

私が主体的に関わった作品には、1989年に竣工した、日本初の短詩系文学館である日本現代詩歌文学館がある。北上市の中心市街地に、木々が鬱蒼と繁る詩歌の森公園があるが、その中で歳月を重ねるにつれて風景に溶け込むようなデザインにしたいと考えた。竣工からすでに20年以上経ったが、同窓生や学生の皆さんにもぜひ現地においていただき、ご笑覧いただきたい施設である。

近作では2008年竣工の北上市立いわさき小学校がある。建設にあたっては、子どもたちと森に行き伐採作業を見たり、木材加工工場を見学したり、上棟式で餅まきをしたりと、森の樹木がどのように学校という建物になっていくか、設計から建設までのプロセスを子どもたちと共有するプログラムを企画させていただいた。

次期市長にという話は突然やってきた。十数年前からNPOを支援する、いわゆる中間支援NPOの立ち上げに関わり、まちづくり活動の手伝いや選挙のマニフェスト作りに関わっていたことなどから、前市長の勇退とともに白羽の矢が私に向けられたのだろう。

私は小さい設計事務所の代表であり、私が抜けた後の経営のことを考えると、どうしても決めきれ

岩手県北上市データ

面積 / 437.55km²
 人口 / 9万3885人(2013年11月)
 世帯数 / 3万5550世帯(2013年11月)
 総予算 / 344億円(2013年度)
 位置 / 岩手県南西部に位置し、東北道と秋田道が通る流通の要衝地。東北有数の工業・流通の集積地である。

ないでいた。そんな中で後のことは任せてくれという事務所スタッフたちのことばで、ようやく腰を上げたというのが実情だ。

今はすっかり事務所経営から手を引き、市長の職務に専念している。そしてこのように決めたことを後悔してはいない。むしろ、背中を押してくれた仲間感謝している。ただ、わが妻だけはまだ完全に認めてくれないようだ。

地域になじむ「あじさい都市」

さて、市長としてのまちづくりであるが、北上市が目指す都市の将来像は、ひと言で言えば「あじさい都市」である。「コンパクトシティ」はずいぶん前から言われており、私も研究したつもりであるが、多くの地方都市にはなじまない理

論ではないかと思っている。

北上市の場合、田園地区は農地に近接して住居を構えないと農業が維持できない。兼業農家が多く、限られた時間の中で頻りに農地に出向かなければならないからである。都市の中心部に移り住むことは農業を捨てることであり、集落から住民が抜けることで必要な都市機能が維持できず、コミュニティの維持そのものが困難になる。

そこでコミュニティ単位に集まって住むことを考えたわけである。それを地図に落とし込んでいくと、小さな花が集まってひとつの花になるあじさいの花に似てくるので、「あじさい都市」と名づけた。この「あじさい都市」はまち中でも、田園地区でも、豊かに暮らすことができる地域の「かたち」だ。そ

れを地域コミュニティとの協働で創ることが、市長である私の使命だと思っている。

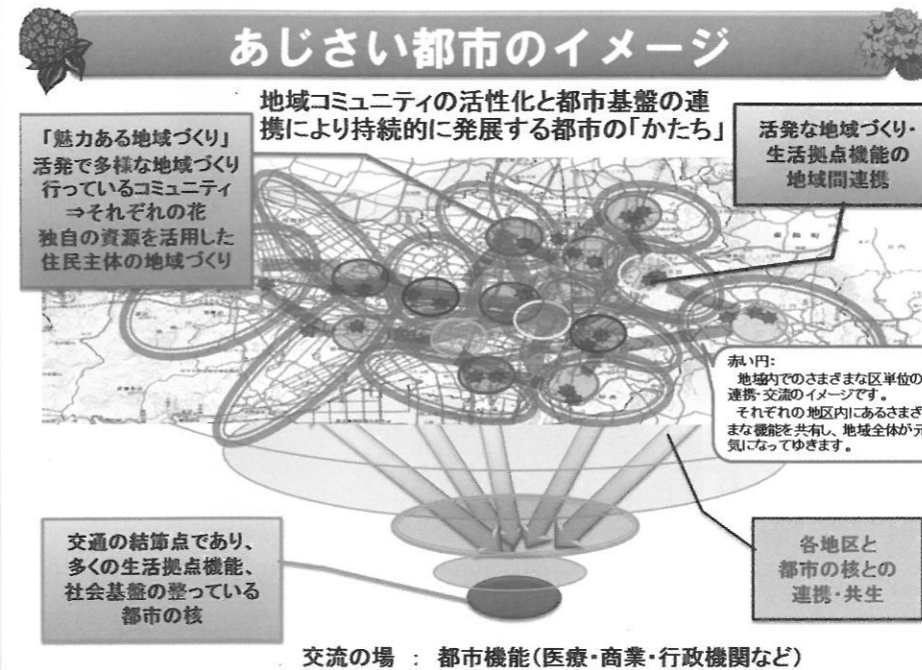
学びのすべてが役立つ生き方を

学生時代、名のある建築家になるのが夢だった私が、今では市長という、想定外の道を歩んでいる。ただ、今までに出会い、学ばせていただいたことはすべて、今の仕事に大いに役立っていることは間違いない。

本稿を読んでいただいている学生の皆さんも、これからの人生、なにかあるかわからない。今、この時の出会いを大切に、学べるものすべてを吸収するつもりで頑張っていたいただきたい。いつか必ずくる、その時のために。



上/高橋氏が市長出馬前に設計を手がけた「日本現代詩歌文学館」下/子どもたちに設計から建設まで、学校の建築過程をオープンにして、実践的な建築教育を試みた「北上市立いわさき小学校」次頁/「あじさい都市」の概念図



Takahashi Toshihiko
 1956年岩手県生まれ。78年日本大学理工学部建築学科卒業。80年同大学院理工学研究科博士前期課程修了。同年高橋建築事務所(現(株)高橋設計)入社し、2000年に代表取締役就任。翌年退任。1992年(社)北上青年会議所理事長。2000年～09年特定非営利活動法人いわてNPO-NETサポート代表理事。02年月～08年岩手県総合計画審議会委員。09年～11年岩手県政策評価委員会委員。11年から北上市長。日本現代詩歌文学館は、1990年社団法人日本建築士事務所協会連合会会長賞、91年社団法人日本建築士会連合会私の推薦する作品優秀賞を受賞。

「東京で一番住みたくなるまち」をめざして

東京都板橋区長◎坂本健 (1985年大学院生産工学研究科博士前期課程建築工学専攻修了)

サラリーマンから経営者へ

私が学生時代を過ごしたのは昭和50年代。東日本大震災で甚大な被害を受けた東北沿岸域を対象にした、「三陸沿岸域を中心とした環境形成に関する研究」を卒論と修論のテーマに取り組みました。

社会に出て最初にお世話になったのは設計会社でした。川崎市立川崎病院や富山県立工業技術センターの設計をはじめ、幕張新都心計画に参画するなど、専門家が結集した大型プロジェクトに関わる経験を通じてマネジメントを学ぶとともに、経営者をはじめスタッフやユーザー、行政機関などさまざまな関係者との間合いも会得しました。この時の経験は、私の血肉となり、今も脈々と息づいています。13年におよぶサラリーマン生活

を経て、生家に関わる特養ホーム開設や社会福祉法人創設、幼稚園運営に携わるといふ、経営の立場に一転して身をおくこととなり、この5年間で介護や幼児教育の現場も窺い知ることができました。

板橋区初となる民間出身の区長

その後、板橋区議会議員だった父の遺志を継ぎ政界に転身し、2005年7月から東京都議会議員として、当時社会問題化していた耐震偽装事件の原因究明および、その再発防止策や認定こども園条例の制定などに取り組みました。

そして、都議の任期半ばで板橋区長選挙に急遽立候補することとなり、2007年4月に第17代板橋区長に就任。現在に至っています。私が区長選で掲げたマニフェスト

は「3つのナンバーワン」と「10のいたばし力UP」です。これは、「あたたかい人づくり」「元気なまちづくり」「安心・安全」の3つを柱に、それぞれにおいて板橋区が東京で一番になることをめざすというものです。板橋区では、私の就任1年目に、このマニフェストの柱に基づいて、「いたばしNo.1実現プラン」という3カ年計画を策定しました。

日々決断が求められる中で

区長になって2年目の夏、中国で四川大地震が発生し、わが国でも遅れていた学校の耐震化を促すために国庫補助枠が時限的に拡大されました。それを受けて板橋区でも計画の前倒しにより2010年度までに全区立学校の耐震化を完了

板橋区

東京都板橋区

面積 / 32.17km²

人口 / 54万224人 (2013年11月)

世帯数 / 28万2942世帯 (2013年11月)

総予算 / 2817.64億円 (2013年度)

位置 / 東京都区部の北西部、中山道第一の宿場。高度成長期以降は、都内有数の工業都市、住宅都市としても発展。

いたばし

させることを決断しました。

また、少し前後しますが、耐震性などに難があった区役所庁舎南館についても、災害時の司令塔となる本庁舎が被災したのでは区民の安心・安全は守れないことから、改築する方向へと踏み切りました。さらに、学校や保育園、福祉園などの改築などの設計委託の発注にあたっては、それまでは価格競争入札によるのが常だったところを、企画提案内容で競い合うプロポーザル方式も採用する方向へと転換を果たしました。

こういった建築に関わる領域では、学生や設計会社の時代に養われた素地が大いに役立っています。本年5月に老朽化施設の更新ラッシュに対処すべく策定した「公共施設等の整備に関するマスターブ

ラン」の今後の展開においても経験が生きてゆくと思います。

もちろん、区政は広範で建築系の施策ばかりではないため、もてる力を総動員する必要があります。しかし、施設経営者時代に培った知見は、例えば公の施設の指定管理者制度の改善を検討する際に発揮できていると感じています。

持続的発展につなげる成長戦略

区長に就任して早6年半、これからの最大の課題は人口減少社会の本格的な到来への対応です。生産年齢人口の減少がもたらす税収減のもとで、超高齢化の進行にともなう社会保障費の増加や、老朽化が進む公共施設の更新経費の急増などの行政需要の増大にも備える必要があります。

板橋区では本年1月、未来に向かって持続的発展を遂げられるよう総合計画「いたばし未来創造プラン」を策定しました。板橋区の“強み”を伸ばしていくことにより生産年齢人口の定住につなげていく成長戦略を前面に打ち出しました。私は、区政の先頭に立って成長戦略の展開に邁進していく考えです。

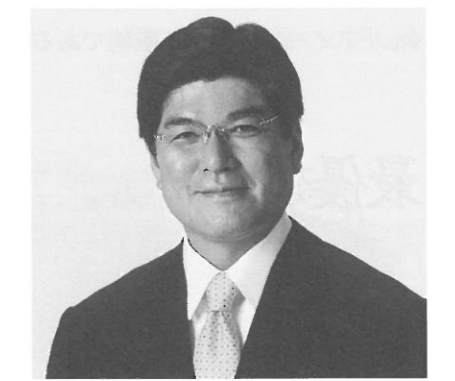
板橋区の人づくりのキーワードは、「もてなしの心」と高い使命感をもつ人材の育成です。同時に職員には、行政経営だけでなく地域経営や都市経営も含めた3つの視座を備えてほしいと説いています。社会は、高い志と広い視野を有する有為な人材を求めています。ストック更新の時代に入り、未来への責任を果たすためにも同窓の皆さんの力が必要と考えます。



左/改築後の区役所庁舎南館完成予想図(右側の建物)
右/板橋区が展開する成長戦略の一環・2012年にロシア・サンクトペテルブルグで開催されたODF(光学設計・製造に関する国際会議)におけるプレゼンで日本光学発祥の地・板橋をアピールした。2014年に開催する会議の板橋区招致に成功した



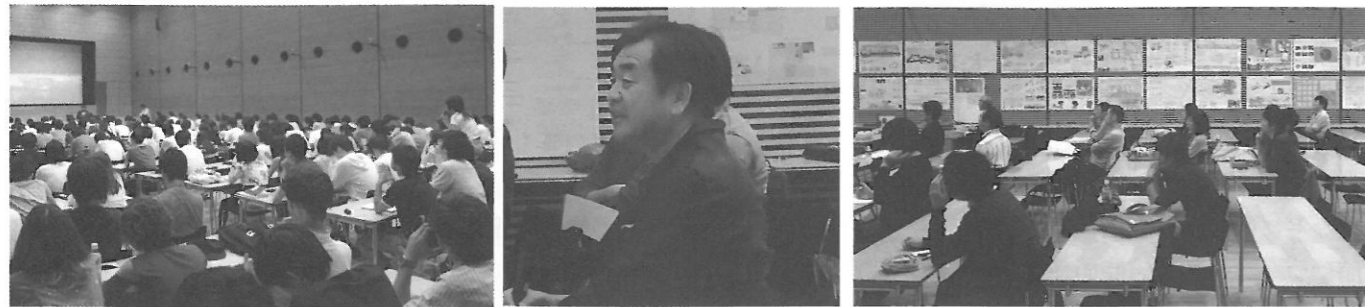
上/2012年10月1日に迎えた板橋区制施行80周年を記念し、区内在住の世界的工業デザイナー・水戸岡鋭治氏のデザインによる板橋区のロゴやマークを制定した。上左/区施設の空きスペース等を活用し、外出時に授乳やおむつ換えの場所を確保するため、板橋区の職員が提案した事業で、今や全国に広がっている「赤ちゃんの駅」のフラッグ。水戸岡氏がデザインをリニューアル。子育て支援事業として2009年にキッズデザイン賞を受賞した。左/板橋区が展開する成長戦略の一環で、区と協定を締結したプロバスケットボールチーム「東京エクセレンス」のリーグ開幕戦における試合開始前のトスアップ



Sakamoto Takeshi
1959年東京都生まれ。82年日本大学生産工学部建築工学科卒業、85年日本大学大学院生産工学研究科博士前期課程建築工学専攻修了、日大大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻満了退学。日本設計に13年勤務した後、板橋区内にある特別養護老人ホームケアタウン成増設立代表者・理事長、みその幼稚園設置者などを歴任する。2005年東京都議会議員初当選。2007年板橋区長初当選、現在2期目。全国民俗芸能保存振興市町村連盟会長。

第5回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告

テーマ/明日の市役所



左/コンペのレクチャーでは300名以上の学生が集まり、質疑応答が行われた。中/2次審査で学生の説明に耳を傾ける隈研吾氏。右/審査会場に貼り出された33の応募作品

桜門建築会が主催する「第5回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」の公開審査は10月26日に行われた。日本大学の建築系の各学部、大学院の在学学生33組が参加。今回の審査員は、世界を股にかけて活躍されている建築家のひとりである隈研吾氏を迎え、自身が実際に手がけた市役所の設計をテーマとして、学生たちに新しい時代の庁舎の提案を求めた。

地域の核となる施設とは

本年の学生設計コンペティションのレクチャーは7月16日に行われ、「明日の市役所」というコンペ課題が審査員の隈研吾氏より出題された。計画地は、自身が手がけた長岡市庁舎、「アオーレ長岡」の敷地である。

設計条件も、当該施設に準ずるものとされた。

日本社会の現状は、人口・経済ともに縮退する社会であり、地方都市の衰退化が指摘されて久しい。しかし隈氏は、このような状況の中でも、例えばフランク・O・ゲーリーによるグッゲンハイム美術館が、ビルバオの街全体を活性化させた事例を引き合いにだし、建築によって地域が活性化される可能性をレクチャーで語った。また、日本の地方都市には祭りに代表されるように、まだまだ地方特有の文化が残っており、文化を再発見する必要があると語った。

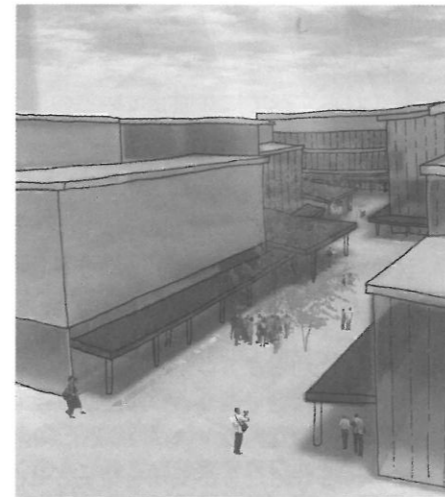
さらに、自身が設計された長岡市庁舎「アオーレ長岡」にふれ、その中庭で市民が結婚式を挙げた事例などを紹介し、将来の公共施設のあり

方の一例が示された。そして、今後の地方都市のあり方を念頭におき、地域の核となる施設として市役所を考案してほしい、と課題に込められた意図が語った。

この日は他に、「浅草文化観光センター」「新歌舞伎座」などの近作や、現在計画中の「富岡市新庁舎」といった国内のプロジェクト、「FRACマルセイユ」「グラナダ・パフォーミングアーツ・センター」など国外のプロジェクトが紹介され、隈氏の昨今の活躍ぶりを短時間で実感できるスリリングなレクチャーとなった。

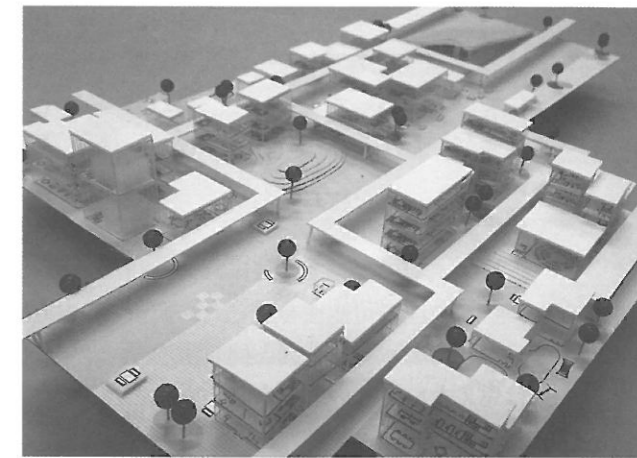
最優秀案は半屋外空間を評価

9月24日の締め切りまでに各学部・学科より33案の応募があり、第1次審査で10点が選出された。集まっ



優秀賞

「雁木が結ぶ、多世代よったかりの場 -長岡シティーホール-」
中島奈津実



優秀賞 「長岡市役所説明書」
落合恵子、中辻千尋、奈良橋佳洋

た案のほとんどが、課題の要求どおり、計画地内で解答するものであったが、中には敷地の枠を飛び越え、市庁舎というビルディングタイプを解体する案も見受けられた。

市役所の機能を街へと解放し、建築をネットワークとして構想する案や、来館者がコミュニケーションするシーンを淡々と提示する案など、選出こそされなかったが、刺激的な提案であった。

10点の通過案を対象とした公開2次審査の結果、最優秀賞に選ばれたのは、小関真子さん・川田実可子さん・安西彩香さんによる「明日の市役所-未来を育てるプラットフォーム-」と題した、建物の外週に配された3つの円弧状の大きな半外部空間が特徴的な提案。この案は、「表

通りから半屋外の空間に引き込まれる雰囲気がとても良く、この半屋外空間にいろいろな可能性が感じられる」と評価された。一方、内部空間のつくり込みにまだ工夫が必要だとも指摘されたが、建築の外側に巻きつくように配置された半屋外空間に秘められた可能性が評価された提案であった。

議論を呼んだ優秀賞の2案

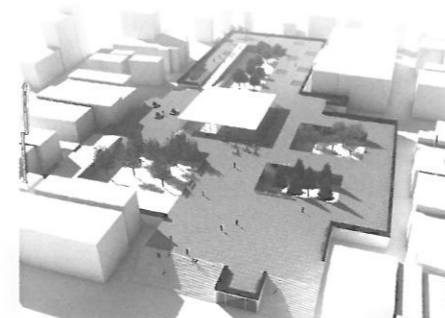
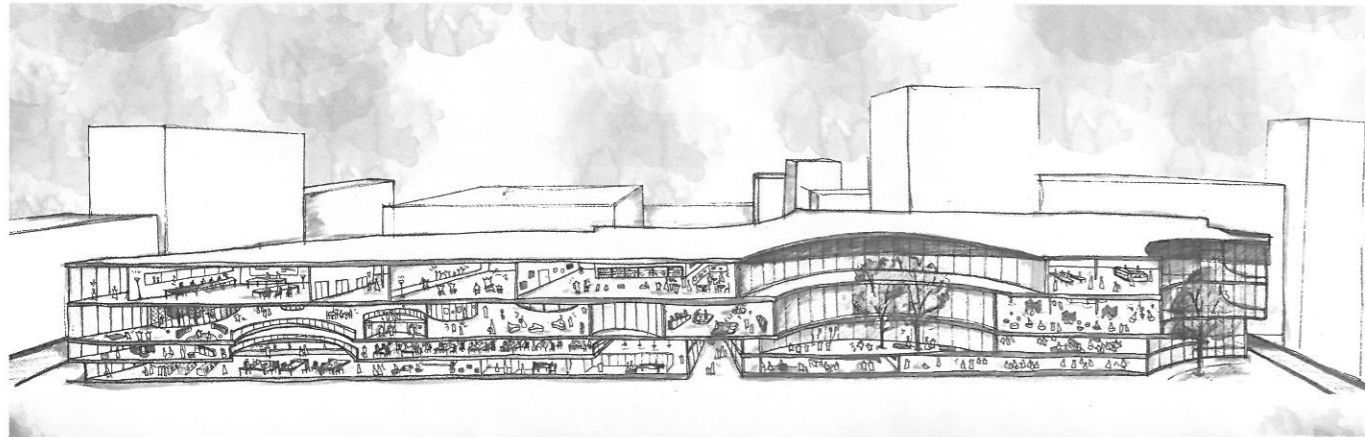
次いで優秀賞2点が選ばれた。ひとつ目の優秀賞は、中島奈津実さんによる「雁木が結ぶ、多世代よったかりの場 -長岡シティーホール-」と題した、豪雪地帯特有の雁木という建築的エレメントを活用し、市民の日常生活の延長に市役所を位置づけようとした提案。この案は、「雁木

に着目して、ヒューマンなスケールでパブリックなスペースを解くというアイデアが良い。実際に細かく設計されており、半外部の空間を「見守りの屋根」ときちんと定義しているところが素晴らしい」と評価された。一方講評会では、雁木が全体のボリュームに対して後づけされたような、付加的な印象を与えてしまう部分をどうするか議論された。

もうひとつの優秀賞は、落合恵子さん・中辻千尋さん・奈良橋佳洋君の「長岡市役所説明書」と題した案。この案は、小さなボリュームを多数点在させることで、さまざまなアクティビティを敷地全体に浸透させているのが特徴的だが、移動空間の大半が外部となっており、中間期以外の季節での使われ

最優秀賞

「明日の市庁舎 -未来を育てるプラットフォーム-」 小関真子、川田実可子、安西彩香

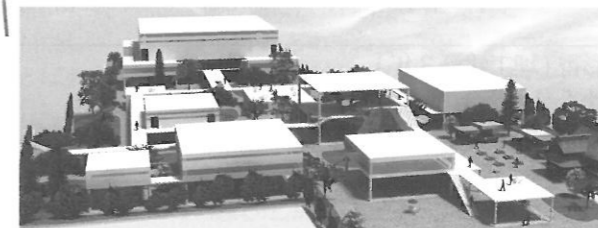
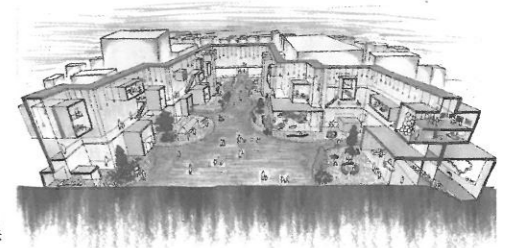


佳作

「Public Park and City Hall」
安祥毅

佳作

「City Wall」
土屋伸吾、小杉真一郎、清水亮輔、波多腰歩



佳作

「明日へ賑わい Town Hall」 ショウカキ

方が問題視された。しかし最終的には、「外部空間の楽しそうな雰囲気が模型から伝わってくる」と、案の接地性が評価され優秀賞に選ばれた。

最後まで攻める姿勢

授賞式での総評で、隈氏は「今回は特に敷地の可能性を感じた。僕が設計したアオーレ長岡と同じ敷地とは思えないくらい案もあった。これが建築の不思議さだと思う」と、建築によってその敷地のポテンシャルが引き出されること、またその逆もあることを指摘し、建築設計の重要性を語った。

また、「これから時代はどんどん変化し、想定外のことが起こるかもしれない。君たちのデザイン次第で、世の中がすごく良くなることもあるし、悪くなることもある」と述べ、これからの建築のデザインを担う学生に対し、社会への責任を認識する

必要性を説いた。さらに、公開審査でのプレゼン姿勢が消極的であることを指摘し、「もっと自分の案に自信をもち、最後までその自信を失わないで攻めていくことが大事である」と語った。

これまで世界を相手に建築をつくり続けてきた隈氏ならではの想いが、このことばには込められていたように感じられた。

明日の都市へ

3.11以降、地方の都市を将来にわたってどう維持するかという問題が切実になっている。また、中央自動車道の笹子トンネル崩落事故に見られるように、老朽化したインフラの問題も記憶に新しい。

一方、7年後の東京オリンピック誘致が決定したが、新国立競技場の計画案がその大きさゆえ、景観的・維持管理的な側面で、東京という都

市の今後、どのような影響を与えるのか議論されている。

これらすべてに共通しているのは、目の前にある既存の施設あるいは都市を、いかに将来の存在し続けるものへと計画するのかわ、マネジメントに対しての議論なのである。私たちは、旧来の右肩上がりの成長モデルを見直し、状況に応じて都市をマネジメントしていく技術を獲得しなければならないのだ。建築設計に携わるものたちが英知を集約させ、都市の明日を構想していくことがますます重要になるであろう。

そのような意味において、市庁舎という施設を通じて、都市の今後のあり方を問う今回の課題は、非常に時宜を得た問題設定であったように思う。末尾ながら、真摯に審査をしていただいた隈研吾氏に心より感謝の意を表したい。

(古澤大輔/理工学部建築学科助教)



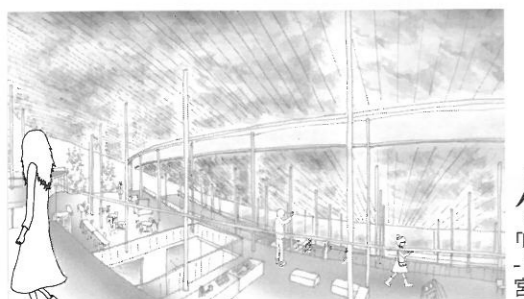
佳作

「まちなかのまち」
敦賀谷俊、白木大一



佳作

「SCRAP CITY HALL」
明日の街の断片を描く市役所
沢田拓郎



佳作

「明日の田園都市」
- まちの中心はいつも市民 -
宮本悠平



佳作

「ユニバーシティホール 長岡」
- 若者が地方を元気にする -
落合俊太

審査結果表

最優秀賞/小関眞子・川田実可子・安西彩香(理工建築3年)

優秀賞/中島奈津実(理工建築M1)、中辻千尋・落合恵子・奈良橋佳洋(理工建築3年)

佳作/安祥毅(理工建築3年)、土屋伸吾・小杉真一朗・清水亮輔・波多腰渉(理工建築3年)、シヨウカキ(理工建築3年)、敦賀谷俊・白木大一(理工建築3年)、宮本悠平(理工建築4年)、沢田拓郎(理工建築M1)、落合俊太(理工建築M1)

応募総数 33点 内訳/理工建築 30点、理工海建 2点、生産工 1点 *表紙は、最優秀賞、優秀賞の作品で構成されています。

オウケンカフェ★レポート

これまで「桜建設計画系研究懇談会」として行われてきた会を、今年度より新たに名前を「オウケンカフェ」と改め、月1回のレクチャーシリーズとして再スタートしました。毎月末にゲストを招いて話題提供をしてもらい、その後に参加した皆さんと語り合います。従来の一方通行の硬い講演ではなく、多くの方が自由に発言できるような、柔軟な発想の会を目指しています。すでに4回開催しましたので、参加した学生の感想を中心にレポートします。

#01

田中元子+大西正紀(クリエイティブユニット/mosaki) 13年7月31日
2013年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞した2人が、一般の人たちと専門家をつなぐユニークな取り組みである「けんちく体操」を紹介した。

立川博行君★理工建築4年

「建築の周辺を盛り上げれば、建築の魅力につながる」。田中元子さんのことばは、間接的に建築を盛り上げようとしているように見えた。そのことは設計を志す人たちの建築に対する想いと同じようだと感じた。

寺岡良祐君★理工建築4年

ユニットの名前を広めるきっかけとなった「けんちく体操」は、その建築を身体で表そうという取り組みで、今まで建築家の口から語られていた「身体性」とはまったく違う。知識が必要な美術鑑賞的視点の建築体験ではなく、あくまで「体操」としたことに、現代型の一般社会への浸透スタイルをみる事ができた。

#02

古澤大輔+馬場兼伸+黒川泰孝(建築家/メジロスタジオ)13年8月28日
メジロスタジオのこれまでの軌跡と3人の今後について語り合った。

小笠舞穂さん★理工建築4年

彼らが影響を受けた多くの思想や設計が、プレゼンの随所に引用されていて、とても印象的だった。隈研吾、西田司、大江健三郎、西沢大良、楳文彦、妹島和世、アレグザンダー。多くの人のことばをちりばめたレクチャーは授業以外にはなく、かといって授業とは少し違ってフランクに質問が飛び交う時間はとても気持ちのいいものだった。

飯名悠生君★理工建築4年

僕は古澤研究室に所属し、日ごろ先生と接しているけれども、いつもと違う一面と、楽しく今までを振り返る3人を見ることができた。講演会のように堅苦しくなく、お酒を飲みながら始まり、緩めの講演という感じだった。オウケンカフェだったからこそ、あのような楽しい場になったと思う。

#03

中崎透(アーティスト)13年9月25日
「あいちトリエンナーレ2013」にNadegata Instant Party(中崎透+山城大督+野田智子)として出品しているアーティストの活動を紹介。

内野孝太君★理工学研究科M1

中崎さんの個人活動からユニット活動を写真とともに紹介してもらい、写っているものが「作品」から「人」に変わっていくのがとても印象的であり、興味深い。両者の活動に共通するものとして、場所を通して、人をどのように巻き込むのか、ということ意識しているように感じる。

西島修吾君★理工建築3年

中崎さんは、「どまんなかセンター」や「24 OUR TELEVISION」などさまざまな人を巻き込みながらアートを完成させ、それでいてその人たちを楽しませる。これは建築家にも通じる話で、建築家ひとりですべてを完結してつくるのではなく、いろんな人を巻き込みながら楽しく建築できれば、きっと建築家の社会的な立場も変わるのではないかと感じた。

#04

小川博央(建築家)13年10月30日
日本建築学会作品選集新人賞を受賞した「ちよだの森歯科診療所」を中心とした作品や、アメリカの建築雑誌「ARCHITECTURAL RECORD」が選出する世界の若手建築家10名の中のひとりに選出されてからの話を紹介した。

野口卓矢君★理工建築4年

「僕の頭には『建築家になる』という思いがずっとあった」。このことばから始まった。学生時代に50ものいろいろなコンペに応募し、現在も数多くの作品を創作する。その作品には、大きくひとつの重要なことば、「時」があるように感じた。



#01



#02



#03



#04

今後の予定

#05 13年11月27日(水)/今村雅樹(日本大学理工学部建築学科)+小泉雅生(建築家)+高橋晶子(建築家)/7月に『パブリック空間の本』(彰国社)を出版した3人による鼎談。
#06 13年12月18日(水)/辻琢磨(建築家)/403architecture[dajiba]の最新作を中心に紹介。

#07 14年1月29日(水)/竹中司+岡部文(建築家/AnS Studio)/ユニットの最新作を中心に紹介。
#08 14年3月5日(水)/末光弘和(建築家/SUEP)/最新作を中心に紹介。

#09 14年3月26日(水)/星野諭(プレイヤー・地域コーディネーター/子ども・若者が主体的にまちに参画するための環境づくりを行うNPOの活動を紹介。

*いずれも19時スタート。場所は学理工学部駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は参加費1000円(当日に入室すれば無料)。会場ではドリンクを販売。皆さまのご来場をお待ちしております。

研究テーマ **建物基礎に関する新たな技術開発**

小規模建築物を対象とした地盤調査技術の開発および廃棄物を利用した高い耐震性能を有する地盤材料の開発

研究室名 酒匂研究室
 教員名 専任講師・酒匂教明
 キーワード 地盤・基礎/地盤調査/小規模建築/液状化/災害廃棄物/地盤改良
 企業等への要望 共同・受託研究の要請 計画・設計等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要

当研究室では、主に地盤工学分野に関するテーマを研究対象としています。以前は地盤の動的問題(地盤の液状化、地震時の地盤物性の評価、交通振動の低減など)や減災を研究対象としていましたが、ここ数年は研究活動環境の変化や実務サイドからの要望により、地盤工学分野の新技术の開発に取り組んでいます。

現在進行中のテーマは、小規模建築物の地盤調査に使用されるスウェーデン式サウンディング試験方法および廃棄物を利用した地盤の造成に関する研究です。前者は摩擦音を利用した測定システムによりサンプリングなしで土質判別するというもので、今後は本測定システムを他の地盤調査にも応用する予定です。後者は、東日本震災の被災状況を受け、災害廃棄物の処理と耐震性の高い地盤造成の一石二鳥を狙ったテーマですが、建築物の建設と解体にともなう産業廃棄物の活用においてコストの検討が進めば、地盤免震として応用できる可能性を有しています。



試験造成地盤を対象とした常時微動測定

連絡先◎短期大学部建築・生活デザイン学科 船橋校舎9号館2階 Tel 047-469-5487 E-mail・sako@arch.jcn.nihon-u.ac.jp

研究テーマ **地域集会施設**

研究室名 浅野研究室
 教員名 教授・浅野平八
 キーワード 公共建築/地域施設計画/木造建築文化論
 企業等への要望 共同・受託研究の要請 計画・設計等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要

研究室の研究主題は、地域集会施設です。

これまでに青年の家、公民館、コミュニティセンターなどの調査研究を各地で進めてきました。いずれも高度成長期に林立したのですが、現在では、財政難の中での公共施設ストックマネジメントの対象として再検討を余儀なくされている地域施設ばかりです。

主な研究としては、地域集会施設の建築類型、コミュニティ拠点施設の室構成、公民館の施設空間論、コミュニティ基幹施設配置論、施設ロビーの計画論、専用目的室の計画論などがあります。これらの成果は「公民館のデザイン」(日本公民館学会編、2010年、エイデル研究所発行)に集約されました。

研究のサブテーマのひとつに木造建築文化論があります。伝統的木造住宅の住まい方、地域施設にみられる伝統文化を継承した和室、木造公共建築が課題です。

今後の課題としては、地域住民の集会の場が地域自治の場へと発展する計画論とともに、木造文化を伝承する地域公共施設としてマネジメントされる施設像を確立することがあげられます。



月例の研究室研究報告会

連絡先◎生産工学部建築工学科 津田沼キャンパス5号館3階 Tel 047-474-2503 E-mail・asano.heihachi@nihon-u.ac.jp

研究テーマ **ウォーターフロント都市工学**

都市のウォーターフロントを快適、安全に、楽しく、美しく整備していくための方法やアイデアを考査する

研究室名 桜井研究室
 教員名 教授・桜井慎一
 キーワード 水辺・海洋景観、海洋性レクリエーション/臨海・親水公園/防災・安全・避難計画/沿岸地域活性化計
 画/水辺の産業観光/水上交通整備/環境価値評価/住民意識調査、海に関わる政策と法制度
 企業等への要望 共同・受託研究の要請 計画・設計等の協力 研究成果の事業化等 その他(行政・企業との連携によるプロジェクトの立案)

研究概要

東日本大震災以降、沿岸の防災に関わる研究課題が増えました。以下、最近の研究テーマのうち、校門会より表彰された「桜建賞」および「加藤賞」の受賞論文を紹介します。

【桜建賞受賞論文】2012年度「水中文化財を対象としたダイビング環境整備に関する研究」(寺口敬秀)、11年度「東日本大震災において発生した東京湾の津波被害に関する研究」(鈴木彩香)、10年度「漁業者と協調するダイビングスポット整備の利点と効果に関する研究」(寺口敬秀)、09年度「ウォーターフロントの景観に調和する保存船舶の展示方法に関する研究」(石井健人)、07年度「臨海公園における喫煙所の適正配置に関する研究」(安岡菜緒)、06年度「都心景観と調和する水門のデザインに関する研究」(成瀬優太)

【加藤賞受賞論文】09年度「水辺空間の特性を活かした屋外広告物の設置方策」(小林史弥)、08年度「海岸景観に調和した擬岩の適正利用に関する研究」(永澤宏文)、07年度「地域的視座からみた灯台の役割に関する研究」(大槻達夫)、06年度「漁業に関連する産業観光資源の魅力要素に関する研究」(大友洋卓)

連絡先◎理工学部海洋建築工学科 船橋校舎13号館5階1356室 Tel 047-469-5526 E-mail・sakurai@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

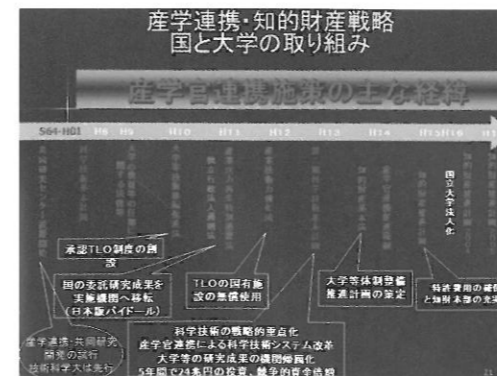
研究テーマ **建築文化・社会構造設計研究**

芸術・科学・技術を総合して知の生産を考える立場からデザインをキーワードに、さまざまな新しい事物を産み出す実践設計とその方法論の研究

研究室名 建築文化・社会構造設計研究室(湯本研究室)
 教員名 教授・湯本長伯
 キーワード 社会構造変革/デザイン/新製品商品開発/創造性開発/施策政策研究/連携まちづくり
 企業等への要望 共同・受託研究の要請 計画・設計等の協力 研究成果の事業化等
その他(中小企業経営・開発革新講座=開物成務塾の開講、産学官連携による地域活性化、新商品・製品開発のコンサルティングなど)

研究概要

本研究室は約40年前から、社会の矛盾や不足に対しなにかを創りだして解決をはかるという基本理念に基づき、「事」と「物」と空間の設計方法研究と実践を行ってきました。前任の九州大学ではこれを活かし、研究センター名称は『産学連携センター』、その内容は英文名称の「芸術科学技術共同研究センター」として、芸術・デザインから科学技術、そして純粋科学までを区別しないレオナルド・ダ・ビンチ型の知の生産を標榜し、かつそれを社会に還元して役立ててもらうことをミッションとして研究活動を続けてきました。開発商品製品は数多く、現在も九州大学開物成務塾は活動を継続しています。この設計を適用すれば新商品の販売方法開発につながり、劇的に売れだした製品もあります。商品製品開発の売りは「デザインで解決」で、重さや機能をあまり変えずとも売れる商品を提案します。売れ行きは商業空間設計にも関係しますので、まずはご相談ください、お役に立てると確信します。



連絡先◎工学部建築学科 郡山校舎9号館3階311室 Tel/Fax 024-956-8749 E-mail・yumoto@arch.ce.nihon-u.ac.jp

事務局だより

第34回建築講座と 今年度特別維持会員懇親会 を開催



駿河台校舎カフェテリアで行われた懇親会

本年11月20日(水)に第34回建築講座が、開催されました。

今回は、大学教育の中核を担う若手教員、理工学部の田島和樹助教、佐藤慎也准教授、生産工学部の永井香織准教授を講師にお迎えして、日頃の研究や作品、社会での活動などについてお話いただき、桜建会会員と大学教員の交流のきっかけとなりました。

引き続き19時より、今年度から会場を日本大学駿河台校舎1号館2階のカフェテリアに移して特別維持会員懇親会を開催しました。

今年度も昨年と同じように「桜建ふれあい2013」と称して、個人会員から寄せられた作品パネルと、学生設計コンペでの作品を展示し、出席者65名の盛会となりました。

第1回 NU アート展の開催

桜門建築会の同好会として5月に正式発足したNUアート倶楽部(NAC)がいよいよ活動を始めました。お茶ノ水周辺を題材にした第1回スケッチ会(6月30日)には約20名が参加。そして10月21日~26日には第1回NUアート展が開催されました。会場となった理工学部駿河台キャンパス1号館4階のCSTギャラリーにはたくさんの学生と卒業生が来場しました。約30点のアート作品(絵画・写真・彫刻等)のテーマは実に多様であり、作品の

巧拙を超えて、アートのおもしろさが楽しめたようです。

現在の会員数は約120名。アート展を見た学生たちの入会も多く、世代を超えた交流が期待されます。

12月1日には、上野公園にて、第2回スケッチ会を行いました。たくさんの方が参加され、盛会となりました。年会費は1000円です。皆さんの参加をお待ちしています。

(NAC会長/斎藤公男)

NUアート倶楽部への連絡は以下のアドレスをご利用ください。
E-mail nuartclub2013@gmail.com

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成25年6月14日~11月10日) 4名

真懸一弘 生産工-56 (株)フジタ	本杉省三 理工建-47 日本大学理工学部
大野幸三 理工海-61 グローリー(株)	亀井靖子 生産工-H11 日本大学生産工学部

桜建会報 NO.98 2013-December
発行人 岩井光男
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会

委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
大川三雄(理工学部建築学科)
委員 山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
ブントラ・S・ガン(工学部建築学科)
矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
大西正紀(mosaki)
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局

住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ <http://www.okenkai.jp/>
専任/星野麻衣子
非常勤/櫻井佐和、大木明子
業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

学部ニュース



海洋建築工学科トピックス

◎大学院博士前期課程1年の青木秀史君(畔柳・坪井研)は、「洪水常襲地帯における洪水に対する伝統的方策とその変容に関する調査研究」という卒業論文で、2012年度の日本建築学会優秀卒業論文賞を受賞した。

本卒業論文は洪水に対する対処法について、制度や計画ではなく、屋敷内における土盛り(水屋・水塚)という物理的で具体的な方策に着目し、単に遺構としての分布調査にとどまらず、聞き取り調査などを通じて屋敷の空間構成との関係を調査した研究である。

◎小林研究室の野志保仁助手の論文「岡本川河口への堆砂防止策としての導流堤の効果 および養浜に伴う飛砂害」、桜井研究室 M1 の秋本悠喜さんの論文「市民認知を継承する津波碑の保存展示に関する研究 -岩手県における現地調査結果に基づく考察-」は、本年7月に

開催された日本沿岸域学会研究討論会2013の優秀講演賞として表彰された。

◎本年4月から9月までに、海洋建築学科の学生および大学院生(阿部紘樹、大谷涼は近藤・山本研、その他はすべて佐藤研)が受賞したコンペの賞を以下に列記する。

・「繋がる水族館」久保田礼菜/1A&A、Vectorworks 教育支援プログラム2013(学内代表出展)

・「福島第一原発における監視と事故原因研究機能を併設した封印施設の提案」菅原雅之/第5回 Vectorworks 教育シンポジウム2013 OASIS 奨学金(研究発表講演)

・「木のつくる”わ”~木都能代の再編~」菅原雅之、遠洞躍斗、鶴田亜有美、中山博貴、井出健、樋浦直紀/歴史的空間再編コンペティション2013/(309作品中11位・入賞)

・「浸都の改築 海拔ゼロメートル地帯における街区更改計画」涌井匠/第45回 毎日・DAS 学生デザイン賞(入選)、第25回 千葉建築学生賞(特別賞)、MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013(222作品中佳作)

・「繋がりから生まれる新しい住まい」志萱侑太/住宅課題賞2013(住宅課題賞・一次審査通過)

・「遅りゆく意識」出山亮/建築新人戦2013(613作品中100選)

・「追浜遊苑」阿部紘樹、岩本桃果、遠洞躍斗、田原拓、堤昭文/横須賀市の海を活かしたまちづくりアイデアコンペ(最優秀賞)

・「呼吸するまち」大谷涼、鈴木彩美、善財寛之、徳永尚亮、森浩平、山川大喜/横須賀市の海を活かしたまちづくりアイデアコンペ(デザイン賞)



トピックス

◎遠藤一成君と山本彰則君(浦部研・4年)は、6月6日、吹田市・吹田歴史文化まちづくり協会主催の「これからの浜屋敷~古民家を生かしたこれからのまちづくり事業提案~」のアイデア部門において優秀賞を受賞した。

◎浦部智義准教授と浦部研究室が計画・設計に関わったプロジェクト「KAMAISHIの箱」(岩手県釜石市の復興まちづくりハウス)が、6月7日、平成25年度日本ログハウス協会建築コンテストで軸組構法奨励賞を受賞した。



建築学科トピックス①

◎田嶋和樹助教が「2013年日本コンクリート工学会賞(奨励賞)」(主催/公益社団法人日本コンクリート工学会)を受賞した。受賞論文は「鉄筋コンクリート構造物の地震損傷評価体系の構築に関する基礎的研究(総合題目)」であり、2011年1月から12年12月までの間に掲載された3編の論文がコンクリート工学の向上に貢献する優秀な論文として認められた。

◎7月に行われた「新瀬戸内市立図書館設計者選定プロポーザル」(主催/瀬戸内市)において、「今村雅樹アーキテクトツ+今村研究室」の案が応募47案

から最終5案に選ばれた。構造は今川憲英東京電機大学教授(日大理工卒)、ランドスケープ・植栽計画は山崎誠子短大准教授が担当している。



新瀬戸内市立図書館のプレゼンテーション



地理情報システムを 基礎から解説する本を出版

海洋建築工学科の坪井塑太郎准教授は、共著として『MANDARA と EXCEL による市民のための GIS 講座 (第3版) - 地図化すると見えてくる -』を出版した。本書はさまざまな地域統計情報を地図として「見える化」するための地理情報システム (GIS-Geographic Information System) を基礎から解説し事例で学ぶ構成になっていることが特徴。

MANDARA は、地域分析支援ソフトとしてフリーで公開されており、これまで自治体職員や市民を対象としたセミナーでの導入事例も数多くある。

この技術は、海洋建築工学科における講義や研究でも、東日本大震災の被災状況分析や都市部における洪水災害の特性、水資源の偏在、津波避難ビルの立地分析に関する研究などに応用されている。



編著者/後藤真太郎・谷謙二・酒井聡一・坪井塑太郎・加藤一郎 発行/古今書院 2730円 (税込) 216頁



建築学科トピックス②

◎6月15、16日、静岡県清水総合運動場体育館で「第29回全国削ろう会清水大会」が開催された。この中で「世田谷ゆかりの大工道具展示 野村貞夫を中心に」が行われ、佐藤光彦研究室がブースの展示およびパンフレットの作成を担当した。展示物は、世田谷区が所蔵する故・野村貞夫の大工道具で、2010年に建築史研究室で調査を行ったうちの一部(53点)である。

◎「第9回ダイワハウスコンペティション」(主催/大和ハウス工業)において、敦賀谷俊君、清水亮輔君(3年生)が佳作を受賞した。「居職の家」をテーマに、234点の応募があった。

◎岡田章教授、廣石秀造助手が執筆者として参加した『絵でみるちからとカタチ』(日本建築学会)が刊行された。建築構造のしくみを絵や写真を通じてわかりやすく解説している。

◎今村雅樹教授と高橋晶子武蔵野美大教授、小泉雅生首都大教授による『パブリック空間の本 公共性をもった空間の今までとこれから』(彰国社)が刊行された。「公共って何だろう？」をわかりやすく、歴史から計画・設計の手法までを解説している。



トピックス

◎岩田伸一郎准教授が「M アpartment」で LEAF AWARDS 2013 の Residential Building of the Year を受賞した。

◎11月22日、「日本大学建築系4学部5学科交流会」を開催した。前半は新設された「未来工房」の見学会、後半は「初年次ゼミを含めた新しい教育について」を各学科よりテーマに基づいた話題提供と意見交換を行った。

◎2013年度日本建築学会設計競技「新しい建築は境界を乗り越えようとするところに現象する」で、「紡ぐ町、受け継がれる街マチ」大内研4年の大平晃司、島崎翔、浅野康成、高田汐莉がタジマ奨励賞(全国審査)を受賞。同競技で、「うごくまち、かわるまち」渡辺研 M1 の香山未来、佐藤愛、高崎智代が関東支部入選、「生業の作りだす情景は海の上に」篠崎研 M1 の加藤絵理、大内研 M1 の牧野内信が四国支部入選した。



上/「M アpartment」の内観。中/タジマ奨励賞「紡ぐ町、受け継がれる街」のプレゼンテーション。下/4学部5学科交流会



右/故・野村貞夫の大工道具の展示スペース。下右/左が「パブリック空間の本」2730円(税込)171頁、右が「絵でみるちからとカタチ」945円(税込)43頁。下左/「居職の家」のイメージパース

